

祖國喪失



祖國喪失

堀田善衛

祖國喪失

著者 堀田善衛

定價 二二〇圓

地方賣價 二四〇圓

昭和二十七年五月二十日印刷
昭和二十七年五月二十五日發行

發行者 鷺尾洋三

發行所 文藝春秋新社

東京都中央區銀座西五ノ五
振替口座東京七四二三四番

印刷者 川口芳太郎

本文印刷 圖書印刷株式會社

オフセット 銀座光村印刷所

製本所 三和製本所

Printed in Japan

祖	波	共	暗	彷徨	祖	漢	斷	
國	の	犯	へる	國	被			
喪			エ	喪	革			
失	下	者	ヤ	失	命	奸	層	
			人	者	者			
五			峽			三九	三三	三六

目次

祖 國 喪 失

驢馬が悲壯であり得るか？ 背負いきれもせず、
投げ出すことも出来ないやうな重荷の下に滅ん
で行くといふのが……？

ニイチエ

波の下

四月の中頃、上海周邊の大場鎮、龍華などの飛行場が猛烈に爆撃され、市中の中國人達が喜んだり不安になつたりして町の空氣が際立つて動搖し出し、貨幣價值がまた急激に下落した日の夜、杉は舊佛租界の美しい拉斐德路ラファイエットを歩いてゐた。突然、全く突然むづかしい關係になつた女と一緒に。杉は女の肩をかたくつかまへて歩いてゐた。女の夫は長沙あたりへ高級軍屬として昨年の十二月から行つてゐるといふことであつた。女はまだ若かつた。上海で生まれて育つただけに皮膚の色艶も表情も、内地の、殊に戦争になつてからの女達とははつきり異り、黄包車を値切る時など車夫を到底人間とは思つてゐないやうな素振りはたしかに内地のものではなかつた。結婚してから四年位になるしかつたが、ほんたうに夫婦らしい暮しをしたことはあはせて半年もなく、夫はいつも従軍してゐるといふ。しかし従軍して何をしてゐるものかも杉は知らない。女の生活は樂ではなかつたにしても、とにかく佛租界の片隅の小綺麗なアパートに阿媽と二人でひっそりと暮してゐた。

杉にとつて突然であつたと同様に、或はそれ以上に、女もまた杉のやうな空虚はなはだし

い男を、この仕事師ばかりの充満してゐる上海で突然發見したのだ。女にとつては發見であつたとしても、杉にとつては何であつたか。彼は沖繩戰の末期に、殆ど偶然にと云つてよいほどに、仕事らしい仕事も使命もなしにたゞ海軍の飛行機搭乗許可證たつた一枚をもつて上海へ渡つたのである。一體何をしに己おのれは上海へ來たのかといふ問ひが、日がたつにつれて當然な推移、即ちこの世でしかもかういふ時世に己れの爲すべきことは何であるかといふ、身に迫り頭を硬くする考へに重なりあつて來つゝあつた頃のことである。

女は杉の手を肩からはづして、しよんぼりと、しかし幾分肩をいからして一步先きに歩きながら云つた。

「上海にゐる日本人達は、みな確かな目的をもつた人ばかりです。日本人の集中して住んでゐる虹口カンキウへ、時々買物に出掛けると、日本の方から、何か物欲しげで非人情なまぐさい風が吹いて來るやうに思ひます。これに比べると、私の家の近くに住んでゐるロシア人やユダヤ人は、慾望や目的に生きるなんていふよりも、たとへ貧乏で慘めであらうとも、あの人たちは人生を生きてゐるな、とつくづく感じさせられますわ。」

また女は強い、何かを振り切るやうな調子で、

「あなたはほんとに駄目な人ね。役割がないぢやありませんか。あなたはきつと仕様ことなくて上海へ、何か大袈裟な使命でもあるやうな振りをして逃げ出して來たのでせう。ロシア人やユダヤ人の亡命者と似たところがあるにしても、そしてあの人たちのやうに生活が出來たとしても、それを營むことが（女は營むといふ言葉に力を入れて發音した）、あなたは營

むことが出来ないでせうが……」

と、彼女の生活への闖入者である杉を厭ひ、憎むやうな、そしてきめつけることができないのがはがゆいといった口振りで云つた。

晝間の眞白い光線のなかでは眼に痛いほどぎつい緑のプラタナスも、夜半近い今は黒々とむしろ無氣味ですらあつた。人通りは殆どない。巴里風な、と云はれてゐる小綺麗な四階乃至五階建のクリーム色のアパートが立ちならんでゐるが、燈火は殆ど消えてゐる。住人は皆相當な金持であらう。しかしその金の來源を考へれば、みなそれ相當に肌寒くなるやうな爲替相場に象徴された國際關係の割れ目から掴み取つて來たものに違ひない。この都會では安住してゐるものは一人もゐない、中國人ですらも。そしてこの割れ目の間には、ナチスに追はれたユダヤ人や、かつてソヴィエットに追はれた白系ロシア人なども、無國籍のまゝ石ころのやうにはさまつてゐた。杉は町を歩き乍らいつも人間世界の積みかさねられた層の斷面を見る思ひに苦しめられた。

杉と女は舊佛租界の大通り アヴェニュー・ジョッフル 霞飛路からそれて裏道に入り、モロゾフといふ小さなキ

ャバレに入つた。黙つて坐つてゐると、今迄のジプシー風な音楽ががらりと變つてワルツで君が代を奏し、荒城の月やら上海ブルースなどをはじめ、白髪のヴァイオリニストが彼らのボックスに寄り添つて來て、うつろな、ひからびたメロディを奏で出した。日本のプロラムをはじめたのは明らかに彼ら二人だけのためである。杉は氣持が悪くなつたのでボーイを呼んでやめさせた。このキャバレに入る毎に、日本の流行歌は嫌ひだ、とこれまで何度かく

りかへしたのだが、彼らは納得しようとしなない。音楽が再びもとのジブシー風のものにかへると、一時ひっそりとしたキャバレにはまたにぎやかな會話が戻つて來た。あたりの話し聲は、上海語、英語、獨逸語、露西亞語などが入りまじり、フロアーの踊り手たちも國籍はまちまちである。十二時が打つと一瞬電燈が消え、バンドマスターが「ダ……ダ……」とつまらなさうに掛聲をかけた。接吻の音も別に聞えない。

「こんな戦争中の……、こんな戦争なんか……」

とふと公子は云ひかけて、この雰圍氣の中で話す日本語といふもの、及び公子の云はうとすることに妙に抵抗するものを感じてか、そこで口をつぐんでしまつたが、公子はそれを押し切るやうにして、テーブルに乗り出して話しはじめた。彼女の眼とテーブルが暗く光つてゐる。

「こんな戦争中の……、日本人なら……、誰もが生きて死ぬやうな役割を持つてゐる時に、生きる場所がないやうな人は、戦争が終つたつて生きる場所なんか……、尤も戦争が終るまで私たちは生きてゐられもしないでせうけれど、今にきつと、もうしばらくして米軍が上陸でもして來たら、そこらの中國人がわあアッとやつて來て、陸戦隊や登部隊が機關銃でそれを殺して、そして私たちは残酷に殺されて、そこらの通りにころがされて……、こんな戦争なんか……」

誰かが聞いてゐるかもしれぬ、かういふ場所であういふ話は不穩當だと思つたので杉は公子を促して燈火管制の通りへ出たが、彼女は何かに憑かれたやうに喋りつづけた。

「あなたは私を滅茶滅茶にしてしまひます。」あなたのやうにこの戦争にはつきりした役

割を持たぬ、持たうにも持てぬ虚しい人間は、この世で一番悪い奴だ、澤山の若い人が死んでゐるぢやないか、といふことまで女は何度も何度も繰り返し、そして本當に自分を愛してくれるか、と云つて泣いた。

彼女の家に歸つてソファに並んで坐り、長く黙つてゐると、公子は爪を噛み乍ら口を切つた。

「私には誰にも云ひたくない、夫の辰野にも云つたことのない祕密があるの。」

「僕にも黙つてゐたら……」

女はこの返事に一瞬愕いたやうに眼を瞠つたが、やがて何かを諦めたやうに、

「もうそんなに生命も長くないと思ふもの。」と云ふ。

「いのちいのちとあなたは云ふけれど。」と云ひかけて、杉は恐しく阿呆なことを云ひ出したことに氣がついた。

「去年の十一月、私は生れてはじめて内地へ、叔母のところへ歸つてお産をして、しばらく休んで赤ん坊をつれて上海へ歸つて来る途中――」

彼女が長崎から乗つた船がアメリカの潜水艦に出遭ひ魚雷で撃沈された。爆發によつて六隻の救命ボートのうち三隻が吹飛んだ。残つた三隻のボートは、自分のことだけしか考へない人間を満載して出て行つてしまつた。誰も赤ん坊を抱へた彼女を扶けてくれないかつた。後に残つた人々も亦自分のことだけしか考へない人々であつた。彼らはつぎつぎに海に飛び込んだ。月明の夜で海は荒れてゐ、人が飛び込んだ時に上る飛沫は、ちらと銀色に光るだけで波と殆ど見分けがつかなくなつた。人間が波と見分けがつかない……？ 彼女はその時、これ

は何のことだらう？ 人間と波は？ と考へたといふ。茫乎として立つてゐると、若い陸軍の將校がそばで長靴を脱がうとして苦心してゐた。なかなか脱げない。彼女はふと思ひ立つて靴を引つ張つてやつた。靴がぬげるとその將校は、彼女に赤ん坊を抱いてゐてやるから早くスカートを取りなさい、海ではスカートが足にまきついてすぐ泳げなくなる、と云つた。彼女はそれでスカートをぬいだ。

「泳げますね？」

「はい、少々、でも赤ん坊がゐますから。」

「それちや赤ちやんは僕が抱いてゐて上げませう。先に飛び込みなさい。ぐづぐづしてゐると直ぐ沈みますよ。」

事實、船はぐんぐん傾斜を増して來てゐた。

二人は殆ど同時に海へ飛び下りた。その刹那以來、彼女は赤ん坊と永遠に訣れたのであつた。彼女は護衛の驅逐艦に翌朝の八時頃に救ひ上げられた。五時間はずつぱり木切れにつかまつて泳いでゐたといふ。あちらこちらから泳いでゐる人々が集つて來て三十人位の集團になつたが、三十分一人づつ位の割合で黙つて沈んで行つた。

「あの冷たさにどうして耐へられたものか、手も足も感覚なんか一つもないのよ。驅逐艦の甲板に上げられた時には、もう假死状態みたいなものだつたらしいの。それでも三十分……、いいえ三十分なんて地面の上の、部屋の中のこととせう、時間なんてものぢやないわ、とにかく大きなうねりに上げられ下げられる、このうねりがいくつか過ぎると、一人づつ沈

んでゆく、あの……、忘れられないわ、驅逐艦の甲板で假死状態の時でも、今度はわたしが沈む……、死ぬなどといふよりも、もつと簡單なのよ、沈むのよ、私が波の下に。赤ん坊は、勿論さがしました。けれどもその將校の人はどこにもあません。島蔭に入ってから方々さがして頂いたけれども、だめでした。波と人と？ と考へた時に、もうだめだったのね。二ヶ月ほどして上海に歸つて、日本人がごたごたと澤山ある虹口が厭でこのフランス・タウンに引越し、一人落着いて、私は、もう自分のものは絶対に手離してはいけない、ともう腹の底から思ひました。辰野は前線に行つてゐて、その時はもうゐなかつたの。子供をなくした、ほんたうに失くしたのよ、子供を失くしたと云つてやつたけれど、別にどうつていふこともない返事が來ただけでした。戰場へ行つてゐると子供や人間はどうでもいいのかしら。」

膝に肱を置いて掌で顔を支へたまま、横目で睨むやうにちらと杉を見、ぐつと身體をそらせ眼の前を拂ふやうに手を振つてから、落着いて、

「間違へたのかしら、波と人をと……、うねりがいくつか過ぎると、私が沈んでゆくんだわ。」

ゆるんだ髪が肩に落ちかかつたので、彼女は立ち上つて髪を束ねなほして杉の正面に立ち、前の壁を凝視しながら、何かを落すやうに、

「何でもないことなのよ」

とそこまで云つた時、ぐらぐらとうづくまつた。杉は失神したのか、と驚いて彼女を抱き起したが、公子は再び何でもない、と呟いて物憂げに立ち上つて夜食の準備をしに臺所へ出

て行つた。その夜、杉と公子とはますますむづかしい關係に入つて行つた。

杉は横に黙つて眠つてゐる公子の顔を眺めて、これで己も一生うまく眠れぬやうなことをやつてしまつた譯だ、と思ひながらも奇妙な安堵感が己れの内側に居坐つてゐるのを感じた。月光が寢臺の上にさしこみ、そして月光も黙つてゐた。公子はむしろ平靜な寢息をたてゝ眠りつづけ、杉は何か恐ろしいものを見るやうな氣持で、眠りえてゐる彼女の横顔を幾度も見直した。

七時頃、十何本目かの煙草を吸つてゐると、公子はひつそりと眼をひらいて、

「ああ、矢張りゐてくれたわね。」

と云つた。

彼女の眼のまはりには黒くふちどられてゐたが、杉がひそかに豫期しないではなかつたやうな憎惡の影は全く見られなかつた。このことが杉に或る深い、ああこれはどちらかが死ぬまでつくことだな、と思はせるやうな豫期せぬ感動をもたらしした。彼女はむしろ明るいと思つていい表情で起き出した。

「逃げ出しちまふかもしれないと思つてゐた？」

と問ふと、

「いいえ、そんな元氣ある？」

と逆に子供らしい笑ひをさへ浮べて問ひかへして來た。

何事もなかつたかのやうに口數少く朝食を終へ、杉は一人アパートの玄關に立つた。向

以側の大きな洋館は重慶にゐる孫科の別邸であつたものと云はれ、今はある日本軍の高官の公館になつてゐた。その門から玄關までの間はこんもりとした植込みになつてゐたが、杉はふと立止つてその植込みを見てゐると、己れの人生が、この白日の下で何かさういふ暗い植込みがトンネルのやうなものの入口を既に一步入つてしまつてゐるやうに感じた。それを出たとき、どんな土地のどんな風景の中へ突き放されることか、彼は殆んど無に近い氣持で考へた。東京での生活のトンネルの出口が上海であつた、この上海のトンネルの出口は何であり何處であるかが漠然と、何か冷いものとして豫感された。

その日彼はかつて大學時代に同級生であつた立花大尉を報道部に訪ねたところ、丁度その場に來合はせてゐた華字紙の顧問をしてゐる舊知の宮下氏の推薦もあつて、突然中國大學生達のやつてゐる週間雜誌「大學周刊」の編輯相談役になることを承知させられた。宮下氏はひそかに杉のためにこの仕事を考へてゐたものらしく、尤もらしい様々な理由のほかに、ぶらぶらしてゐると憲兵や領事館警察がうるさいから、とつけ加へた。杉は事情も充分知らないし、言葉もまた充分でないから、といふ理由で一應斷つたが、被占領國の學生達が何を考へてゐるか、これは戰亂の現代が最も端的にその素顔をあらはすところ、とも考へついたので、殆ど仕事らしいことは何もしないといふ減茶な取定めでこれを引きうけた。

午後は早速五人の各大學を代表した學生の編輯委員と會つたり、酒を飲んだり飯を食つたりして、すつかりつかれて、夜更け三日ぶりで馬斯南路^{リユ・ド・バス}の自分の部屋に歸つた。

いつまでたつてもなじめさうにもない、硬い感じの洋間である。立派な洋間と云つてい

であらう。杉は何處へ行つても恐らく自分の部屋といふものを持ちえないであらう已れを想像しながら、部屋裡をコツコツと足音を立てながら行つたり來たりして、昨夜からの出來事を思ひかへしてゐた。

壁に、何といふ畫家のものかわからぬが、どことなく南歐の畫家のものでらしい匂ひのする複製畫がかゝつてゐる。海岸に一人の女が寝そべつてゐる繪である。水彩に近いやうな手法でさらつと書き上げられてゐる。杉は近づいてこれを眺め、

「もとよりこんなに明るくはないが……」
と呟いた。

もとよりこんなに明るくはないが、しかしこの繪には何かわかるものがある。青い海と空の奥の方は奇妙な具合に濃い紅ひで燃え、襞をなして奥へ奥へと心を惹き込んでゆく。ちつと見てゐると、たしかに心が惹きこまれてゆく度合が秒を以て數へられるやうにさへ思ふ。彼の心は海邊でごろりと寝てゐる裸の女のやうに屈託のないものではない、しかもなほ繪の女も決して濱邊に落着いてはゐない、作者の精神の一角の崩れが杉にはよくわかるのであつた。

「心惹かれる……」

とまた誰もゐない部屋で一人呟いた。言葉は意味のないバラバラな音となつて壁からかへつて来る。

この繪の、空の奥の紅ひは、如何にも未知なものである。未知なもの、それは觀る者の心の